

慶長十九^{甲寅}年

一 正月朔日甲寅風吹 御禮如常

大御所様江戸^ニ御越年朔日之御礼前

將軍家西丸へ御礼^ニ御出被成^已刻

一 二日快晴 諸大名西ノ丸へ出仕今夕 御城御謠初

着座 左 松平和泉守

松平甲斐守

松平丹波守

松平下総守

加藤左馬之助

小笠原左衛門佐

松平山城守

小笠原兵部

松平外記

松平河内守

藤堂和泉守

牧野駿河守

一 去年之冬より大御所様御馬廻衆大方

江戸へ詰申候

一 五日 大御所様御本丸へ御振舞御能あり

高砂 百万 善界

次男之若君^{九才}御能三番被遊候 御臺所

御見物御座候^ニ付^而大名衆之見物^者無御座候

六日諸宗之出家 大御所^江御禮申上候昼時

分より天台之論儀御聽聞其後浄土之

法問御聽聞其後笠間月山寺三百石寺領

被下

一 七日 大御所葛西へ御鷹野 御出^公方様御遠被遊

九日 將軍家へ諸宗之出家御礼天台浄土

法問御聽聞如右^東金へ宿^公方様より為^上使水野

一 十六日雨降大久保相模守入洛藤堂和泉守屋敷

に罷在京中吉利支丹を召捕御法度^ニ申付

京^ニ寺^一ヶ^所有西之京之寺ハ火を付焼拂

四条之町^ニ有寺は打破二人之住持ハ西海へ

にけ行

大御所様葛西より千葉筋へ御鷹野被成

それより東金へ御成御鷹今度十三居

手負或ハふまれ申候蠶數多取候得共御機

嫌悪敷同十八日江戸へ還御又村越茂助

死去^去四^日旧冬相州中原迄致御供江戸へ御帰

以後相煩俄^ニ如此

廿日大久保相模守御勘氣^{十九日大御所様本田}

山口但馬婚之儀不得上意曲事^{佐渡守被仰相模守と}

廿一日小田原之城請取^{思召開子右京主膳共御追放云々}

内藤若狭牧野右馬允浅野采女松平

越中守本多出雲守高力左近大夫參城請

取申候^{相州從}

同日 大御所様江戸御太立^{神奈河廿一日藤沢廿三日}

廿五日小田原へ御着 將軍家も小田原へ

御成同廿七日雨降 大御所様小田原御出

將軍家江戸へ還御此間小田原之城二三ノ丸

を破り本丸計也小田原御出之時分箱根山

中間五間置一人宛弓鉄炮^{保田長兵衛鶴亦左衛門}

分三嶋より大磯迄人留有之^{廿四日三嶋へ參留之}

同廿九日 大御所様駿河へ還御^{川に橋迄宰相殿中將殿}

越後國福嶋之城水入之池^{少科殿為御迎御出則供奉}

御普請被 仰付候衆 松平筑後守米沢中納言松平

下野守 最上駿河守 松平陸奥真田伊豆守

村上周防守 溝口伯耆守 仙石越前守

佐竹右京大夫 南部信濃守

此頃江戸之御城も御普請有之

一 此頃江戸大名衆之内屋形之結構成^{松平}

筑前守屋敷一番也門之結構成^者上総介殿

御門一番也^{毎日土井大炊助為御使江戸より參賀儀言上移時}

二月二日大久保相州罪科^{是ハ相州一味衆御近習有之候間改易被 仰付ト云々}

近江之知行所へ下向す是 大御所様より被

仰付如此小田原五万石被召上^{同次右衛門尉城跡モ}

此人御譜代相傳之臣十三才より大御所へ

御小姓仕殊 御寵愛被成一度も不肯御意を

今年六十三才か様^ニ罷成事如何と人不思議^ニ

存去年十二月 大御所様中原御通之時

馬場八左衛門と云者目安を上る事何度也

是ハ大久保石見謀反も可仕様^ニ御うたかひの事

有之然るに相州と石見入魂にて一味仕様

言上申候誠^ニ跡なき事也然共相州と不快之衆

有之て偽りを真らしく申上候^ニ付^而惡鋪

御耳^ニ立申候此馬場八左衛門八年八十計^ニ罷成

候甲州穴山梅雪家老也元來佞人深く穴山

相果て後於万殿^ニ付^而申色々惡事有之

御預^ニ罷成小田原^ニ致籠居思ひ當り候得は

不思議成事共御座候由以書付を申上候

其頃相州結構成御家老^ニ御家人過半

此人之患^ニなつき加賀守被相果候時も江戸

之侍衆大小過半小田原へ見廻候事夥敷

御耳^ニたち其上成人之加州^ニ別れ歎き

の餘りに万事述懐之様^ニ見得申候其上

相州之養女五三年前山口但馬子息

へ嫁此女ハ日向守孫女長門守息女なり

兩御所へ不奉得内意事不届之由被仰

不快相州先年石川日向守ハ相州舅也

此儀を被言上處^ニ尤と被仰之間重^而不及得

御意事かと存候間相濟候に如此之段迷惑之由

申不快折々出仕申候を述懐不奉公之様^ニ相見得

申候間 公方様御無異被成如此之得折節上目

安を申候今度相州供^ニ參候侍共暇を被出候間

自京罷下候

一 右之縁邊之事古石川日向守被得御意候事

必定也然共其時迄ハ安藝守日向孫娘父不肖

御意^ヲ其後安藝守御勘當^ニ大垣を追江戸へ

參かくれ居申候縁邊之事重^而不致言上

之由蒙貴命候故也

一 駿河沼津之城可破脚之由被仰候大久保

治右衛門男も去年病死故違跡不立

一 二月三日浅野但馬守御目見得兄紀伊守

跡式被 仰付是ハ久敷大坂之人質^ニ參秀頼へ

御奉公申仁也然間跡目望候はば 大御所様如何可思召かと氣遣存家老淺野左衛門佐以下例相談末子之弟淺野采女正を申立跡目

望候へ共大御所様より兄之但馬守被召出被仰付候間一入置存其上後 蒲生飛騨守殿後家を此但馬被下候今日江戸へ可参向旨被仰出

二月十四日江戸年寄衆并江戸老中町奉行御留守居奉起請文

同廿二日阿波國之浪人米津清右衛門於配所御成敗

江戸町中大火事 佐野修理大夫事内々不儀令連續候處御吟味有之可被 仰付と思召御延引候得は當年令在國江戸之加治を山上より見候て早馬乗馳來候在國衆不得御意参府曲事第一也

三月大 朔日 佐野修理大夫城破却其身可令在江戸之由公方様より被 仰付

三月七日加賀家中高山南ノ坊と申者吉利支丹之伴天連成宗旨を改可申候由上意之間加賀殿より被申付候へ共改申間敷と申切此者元來荒木乱之時信長へ忠節之者也近年加賀罷在知行二万石取申候命ハ御助け被成南蛮へ御拂被成候蛮人百餘人肥前長崎迄迎參同道申候高山

娘は横山山城守よめに候へ共令同道参度由望つれて南蛮へ渡る

同五日柴山小兵衛堺之奉行被 仰付 朝倉藤十郎去年より堺罷在候柴山替り令下向又伏見罷在候中坊飛騨守奈良之代官被仰付是は横死仕候中坊子也

同九日 公方様右大臣御補任

三月十二日板倉伊賀守家來恩田金左衛門

有御科從類十人絆を打京より伏見へ被引渡 三月十五日今日より越後國高田之御城普請初る

同日堀伊賀守改易是ハ大久保加賀守肝煎にて本多豊後守聲と成依之別相州儀

取持候間如此被 仰付古堀左衛門督弟也近年御書院番頭被 仰付御出頭仕同時大久保右京其弟主膳河越へ罷居其後奥へ御預同時御勤氣之衆數多有之大久保

与一同將監同半助日下部河内守森川内膳青山大藏少輔堀伊賀守

同廿六日池田三左衛門殿御内儀自備前駿府へ御下向是ハ 大御所之御娘也初小田原氏直之御内室女子一人御座候氏直早世之間

若年にて後家と成候処秀吉公御肝煎池田三左衛門被 仰付女子をは三左衛門子息武藏守被仰付但此息女無程早世其後數多之子供出生也久敷 大御所へ御對面不被成候間御下向但御子息ハ備前之主也其兄武藏守播磨有若備前を可取奪かと疑心國替之御所望有かと申候

四月三日岩付高力河内守死去此頃古河之主小笠原左衛門佐も病死四十五小室之仙石越前守も死去

同十六日片桐市正大坂ノ駿府へ下着

此近年 大御所様近習女中府中金銀の被利買候此使ハ神子を頼候てかく申候

此神子利發成女甲斐々々敷才覚元利相調返弁す去頃池田備後借有由云含彼袋を渡すか様之事度々之事成或時を切不見して両替町へ出商人に渡す是を見れハ内にす石を裏たる也神子驚彼袋持帰て右之用人返す用人金此方不知と申候間神子と公事成候て

両方あらそひ神子云汝は我を謀にして主之備後守か妻を犯と申候其事已露顯して彼者被押籠達 上聞候間か様之事町奉行彦坂九兵衛可相計由被仰此銀過分成備後返弁不叶其上矢外聞之間身上如何可有と云備後不限歴々衆令借用今返弁難成候

五月五日江戸より酒井雅楽頭為御使駿河へ參是右大臣之御札之御名代也同八日吉日出仕銀子三百枚御太刀一腰御進上也雅楽頭に 大御所様より長光之御太刀を被下

同廿日羽柴肥前守越中於外山之城痘瘡之煩死去五十三

片桐市正此間令逗留今日御暇被下罷上八月二日大佛可懸供養之由被仰付

同廿八日美濃國明智之住遠山民部少死八十才

六月六日天台之三門跡御下向山徒召連於御城天台之論議を被聞召

今年撰津河内美濃三ヶ國洪水

同廿一日山口駿河守肥前長崎へ被遣

同廿四日 將軍家右大臣御轉任之御祝儀御能御振舞被下大小名登 城

蒲生源左衛門近年牢人駿府罷在候去卯月事相濟會津へ罷下路次腫物

相煩須賀河と申所にて六月十二日死去九州長崎古有馬修理子息左衛門佐日向國高橋右近跡を被下彼領地へ相移候処家中之者一人も不隨之是伴天連衆故如此依之 大御所様より彼等を御誅罰為可被成山口駿河守に被 仰付人數ハ嶋津陸奥守以手勢を可打果との御意也

同十七日於大坂織田民部入道死去去夏の頃より大坂中ひそめき不静是

大佛之鐘之銘ハ秀頼之婦依僧清鑑長老
作之此鑑長老洛陽無双之智者也太閤之
御代に被召出高麗へも御陣之時分御使
參高麗人も隔心存候由殊更能書成是に
より一派之長老も是をそねみ皆不和之衆
多し去間今度大佛之鐘之銘之内國家
安康と云四言之句とあり是を見て日頃
鑑長老をそねみし悪智之雅僧とも
家康公調伏之下心ありて此句を作り候間
今度之御供養ハ関東調伏之供養なる
へしと申出しける間此事駿府へひひき
大御所様御立腹被成候付片桐市正大
驚き其身ハ病者又下向も不叶先此事ハ
秀頼公も御袋も御存知無之清鑑長老之
作也と長老御尋被成候へハ此銘之事國家
安康と書付申事家康公ちやうふくに
非ず如何にも執し奉ての事也とて其
品々の言葉を古事來歴を引敷多之
文書を書出し御断を申上是ハ智者寄合候て
吟味仕候はば一々申開候と一ツ書仕指上候間
其趣を駿府へ罷下可申上由大坂へ被仰付
市正家老梅戸忠介と申者を相添夜を
日について罷下候へハ大御所御憤深して
清鑑長一ツ書取上させ給はず不届之由
御立腹韓長老ハ彦坂九兵衛御預被成
度々本多上野介宅へ被召寄穿鑿也

一 七月廿八日佐野修理大夫御改易信州松本へ
御預廿八日大御所様被御出候間廿日江戸へ從違見
御料重其上其身不届共少々就着之終如此
伏見之御番當八月替申付井伊掃部頭
御暇被下

一 八月大
朔日内々當月二日大佛供養可仕由兼日
相定七月初より大佛殿之廻を飾り導師ハ
三室院殿咒願師ハ妙法院殿相定天台之僧
五百人真言之僧五百人寄供養之用意餅

六百石春柳樽三千万無謬尽美毎日近國之
男女為結縁群參数万也然共関東御立腹
之間諸人むなしく掃供養もなし
一 同六日未刻大風及申刻三河吉田松平主殿助
建立之會下寺近日可有法事とて粮其外
令支度処俄風吹來寺を一問餘天上へ
吹上家内之物不残如箒拂吹散河端之田町
一町家共吹失人五人死二里計先牧野村も
家十一間吹上老女一人雲へ吹上頓落たり
末死云々三里先西茜と云村にも家十間計
右同前

一 八月九日伊勢大神宮同國野上村飛移
詫宜有就其廿八日山田遷宮其時雷鳴
風吹へしと也然間村々より躍構參詣す
神羅奇特有之
自大坂片桐市正同主膳大野修理鐘之
銘之為申分下向今度は藤枝迄駿府之内
内證有府中へ直にハ不可入と阿部川を
へたて誓願寺罷在此旨駿府へ進達候へは
本多上野介安藤帯刀成瀬隼人傳長老
誓願寺へ參御立腹之段為申開候市正ハ
秀頼曾不被存候韓長老不届仕候委細ハ
御尋可被下候と申上候御意には今程ハ御年
も寄られ候へハ秀頼も將軍様同事
孝行にこそ可有処却調伏被致候事
一切御合点不參事也此方にハ秀吉被申
置候通少も御違背なく大坂を被進七拾
万石餘之知行被進置候秀吉被申置候通
を秀頼違背之事多候へ共幼少之事
候得は御勘忍被遊との御意にて別之儀も無
御座候扱重市正ハ上野介に申候は是に
相詰各を頼候得共訴訟之儀何共不仰出
事も無御座候間江戸へ罷下將軍様御指圖
を承重秀頼御訴訟可被申候由申候
上野此旨達上開候得は將軍様之

何と御指引可被成事共不思召との御意也
扱又市正主膳修理爰元罷在候てハ
當所務之時分にも罷成候万事大坂之
仕置ハ何者申付候哉沙汰のかぎりとの
上意付市正驚き主膳修理をハ指上セ
市正ハ先誓願寺逗留此内駿府の上意
を恐れ見廻之衆一人もなし本多三弥
計市正知音にて切々かられて見廻人皆
奇持申候
一 福嶋掃部左衛門大夫家中之者於江戸目安を
上於蒲原上目安彼者駿府於城下廻
借自主搦取之 大御所御立腹依之目安上
被放右搦者籠舎被仰付
一 自九國長谷川忠兵衛駿府へ參申上ハ
此度令來朝黒船之伴天連詫言いたし
此以前のことく吉利支丹九州に居住
仕度と申船中之物曾不令賣買候此
事言上參候か又長崎邊有馬家中之者
御成敗付可得御意事有之故か
一 かほちやより上る虎子二ツ駿府へ來籠
入馬付通同いんこも來
一 廿三日廿四日伊勢四ヶ市海關東へ下船
三艘沈蜂須賀阿波守家人也
一 廿七日水野監物從江戸為御使駿府へ參候
廿八日伊勢大神宮從野上山山田へ遷宮雷
鳴大風吹不思議也洪水江戸も大風吹大小名
之家顛倒す伊達政宗松平筑前守酒井
左衛門家門ともに顛倒す駿州遠州兩國
風吹かす

一 駿府御城之女中欲企惡逆則糺明せら
るる伴天連宗也此密通之男被追捕思
違恨企如此之儀を右之男ハ原主水也武州
岩付之高力左近所かくれ居候を被召捕候
彼女房ハ野尻彦太郎か妹也兄彦太郎も
此科により被押籠

一 廿九日為御使者本多上野介江戸へ被遣

一 大仏鐘之銘之事智者寄合色々御吟味

之上韓長老申わけ少埒明申候や市正

御免被成府中へ參候此日大坂之秀頼公

御袋様より大藏卿之局二位之局正永

三人を御わひ言に駿府へ被遣

一 九月二日地震本多上野介自江戸駿府へ

帰參

一 同九日里見安房守出仕いたし候所 公方様

御上使にて被 仰付安房國國替可有由御意

あり其身ハ一僕 大久保千 相模守孫 加賀守子孫 所へ可罷在

之由被 仰付候間彼所へ參廣間 罷在候房州へ

は本多出雲守内藤左馬之助那須衆土頭被遣

若家人共難渋抱城をハ可責殺由也無異儀

於令出國は日頃安房領分之中可移鹿嶋

と也

此人大久保相州之孫 嫁候 付 被處彼縁座云々

是又去々々山口但馬守事相州申たて

候 付 就縁者 專及荷擔候故きと申候

一 扱又駿府 大坂より被參候大藏卿二位局

正永此前ハ直 御城へ被參候然とも今度は

氣を仕七間町と申所 宿を取本多上野介と

御あちやの局へ御案内を申入候へハ此由

達 上聞申 付 早々御城へ參候へとの御意

之由御あちやより申來候間三女悦ひ致

登城懸御目 其時淀殿秀頼息笑 御座候

哉と御懇意之御意殊 其存姫君ハ御くわ

いにんハなきかと御尋被成候是ハ最前姫君

御女子一人出来させむへとも御早世被成候間

其跡其後御子も無御座かと無御心元思召

由之御意 一段御機嫌能御馳走被下候

三女中申上候ハ鐘銘之殊韓長老不届

仕御袋秀頼被致迷惑候由申候へハ替る御

あいさつもなく不苦事との御意也扱三

女中申上候ハ關東御鷹野之時分にも

成候間御暇被下候へと申候得は江戸へ參

御臺様之御息笑成様をも直 見候て

御袋へ申候へとの御意にて江戸へ三女中

被參候其跡にて九月九日市正御暇被下

御機嫌能御めししの呉服令拜領御金をも

被下悦ひ罷歸候処 本多上野介為御使

被仰下候得は金地院も跡より被遣今度

大仏鐘之銘之断之事女在無之と数度

推返断なれハ指置ぬ吾老年之事なれハ

明日をも不知事也尤將軍と秀頼との

事別条これあるまじけれ共是一ツ之氣遣也

市正能分別して將軍と秀頼との間氣

遣無之兎角之事如何様とも市正に計

らふへきとの淀意也又此由三女中へも

被仰遣候との御事なればとのあひけり

市正申上ハ先以大佛鐘銘の事指置せ

みふとの御事忝御事也大坂にも此事

悦可被申扱又將軍様と秀頼との御間

御氣遣 思召さる様 市正計ひ可申由承候

其品も候はば如何様にも計ひ可申候其品を

少承度存候間其由被仰上可被下と申

上候得は上野申ハ我等もか様 御返事可

有と存其品を御尋申上候へはいやいや

それハ市正分別 可有とて兎角之品ハ

不被仰聞候御迷惑察入候得共何とも可申

上様無之とあいさつ也市正重 申ハ此上

は大坂城を被召上何方にても替地をは

可被下事か又秀頼と御袋一年替 在江戸

可仕事か此内を今一度申上度由申候へ共

此言上ハ成間敷とて御兩使は御帰也市正

不及是非梅戸忠助と申家老を為使御あ

ちやとのへうかかひ候得共同様之御返事也

其内三女中江戸へ帰はも御小袖被下

同十一日駿府を罷立

一 此頃駿府之町 化物あり夜續松を立城之

方へ行と諸人見之消る

一 同十四日松平筑前守下駿府肥前跡式不

可相違と被仰付從江戸為迎土井大炊頭

來今日着府江戸へ令同道可下との儀也

一 伊勢にて大神宮託宣有可有合戦候山田

町 火をたて可申由也彼國中跳不止

一 五機内にも誹あり

一 同十七日松平筑前守出仕進物

一 黄金三百枚 御太刀一腰 江梅上

一 加賀絹二百疋 一 白加賀絹百疋

一 三人之若君へ黄金三十枚宛進上但刀

脇指可被相添由 候へ共御意にて被止

一 おあちや 一 おかち 一 おまん 一 おうめ

一 右之四人へ黄金十枚綿二百把

一 おなつへ金五枚綿百把其外之女中へ銀三百

一 枚

一 黄金三十枚小袖十

一 本多上野介

一 黄金十枚小袖五

一 安藤帶刀

一 同

一 成瀬隼人

一 同

一 永井右近

一 同

一 松平右衛門大夫

一 同

一 醫者 宗哲

一 同

一 後藤庄三郎

一 同

一 御太刀 御刀

一 大御所様 筑前守 被下

一 今度江戸 御普請被致候上方大名衆へ從

一 將軍家銀五百枚小袖五拾 御馬 五疋

一 被下其次銀三百枚小袖三十御馬三疋

一 其外銀御小袖御馬計也隨其人被下

一 松平武藏守各先達 上自余之衆暫在

一 江戸也重 暇給可被上か武州ハ蒙仰事有之か

一 六月廿一日於駿府被召籠候女 成敗

一 原主水ハ手足十指切其後追放

一 福嶋家中之物從江戸來尾州最前崩

一 たる石垣を令普請

一 大坂秀頼衆出頭人其外之若者共内々

六月廿一日
可見其日之帳

一 此頃駿府之町 化物あり夜續松を立城之

にて牢人をかかへ器具等用意無障

此事隠蜜二いたし候へとも悪事千里を

行大御所様御耳二たちけれ共少も色三出し

給ハす大坂より手きれの時を御待候哉

御断も無之時節大佛之鐘之銘二悪鋪

文句御座候由金地院圓光院二言上三付四

以之外御腹立己二御手切三及候処二韓長老

市正駿府二相詰子細一々申ひらき候間

様子能相済市正御暇被下罷上此上は

関東大坂御無事二弥可目出度候処一々

又市正身躰二無実の悪儀出来若臣一不和

と成己二及合戦候得共市正無料して

申ひらき大坂退去此事二付終三秀頼

御滅亡ありし事真二運之極か不意之

事共出来俄二関東御手きれにて御合戦

あり一

片桐市正九月九日御暇被下候へ共病氣散々

晩二江州土山一着候へは大坂之女中衆も

當所に泊候間以家老を申越けるハ各々ハ

明日十八日大坂へ可参着我等ハ十九日参着

可申仍二懸御目談合可申事あり如何

と申越女中之返事二市正殿御病者一

御太儀千万二候得共大雨一候得は同は是へ

御越可被下由返事成市正心得願二

女中之宿所へ来其頃氣分散々之躰也

市正申ハ駿府二各々一對面なき事

上を輕し故也鐘之銘之事 漸申開

大慶至極也と申女中何も真二御手柄

可申様無之秀頼公も可為御大慶目出度と

申扱御相談ハ何事やらんと問市正申ハ

各々へは不被仰聞候哉 大御所二六ヶ敷

なそを御かけ被成候間大坂二致相談とき

見可申候と存候得共氣分悪敷候間つま

り候てハ如何と存少も氣分能中二此事

何にも申開を度存候と申女中其御なそ

我等方へも駿府二御あちや一御申越

此段市正に被仰聞候由承扱々御六ヶ敷

御なそかなと存内々二令相談とき見

申候と申市正聞扱各々之とき様承度候と

尋けれハ女中申ハ秀頼様か御袋様御在

江戸候へかしさ候はば御氣遣有間敷との御

なそとき候由扱又市正殿之とき様

承度と申爰二市正子細を不申余之

事を申大坂二御相談之時可申かと存候へ共

病重り候はば如何と存候て不殘なその

とき様申聞せ候へハ是を女中悪敷申

なし大坂乱之根本と成真二大事之事也

市正女中へ物語申ハ我等御なそのとき

やうハ秀頼様江戸之御智二候へ共未

御智入なし御智入となそらへ姫君様

御同道被成一度江戸へ御下被成江戸にて

御屋敷御取御作事被成少々間被成御座

以姫君様を 將軍様へ御懸意二被仰上扱

御上之後も江戸御臺様と大坂御袋様と

御一躰之事なれハ為御見廻江戸御屋敷へ

御下向被成あなたこなたと被成候はば如何二も

始終迄何之御氣遣も御座有間敷と存候

此段を御相談申上秀頼様御袋様御合点

有之ハ重二江戸へ参可申と物語申女中衆

聞て是ハ我等も同意二御とき候ものかな

扱其上ハ無之候哉と被申市正申ハ此上ハ

無之若ハ日本一之大坂二御座候事 大御所

御氣遣二思召との御なそかさ候はば何方一も

能所を望候へて大坂之御知行高二御加増

にて御國替可被成との御なそとより外ハ

なそのとき様無之と申女中何も扱々

能御とけ候ものかなとて暇請して立

十八日未ノ刻二女中ハ大坂へ参着す此道中

被亡ける亡靈鬼神共大坂を滅せんために

彼女中之魂二うつりかはりけるにや大藏卿

正永不慮二心かはり今度駿府二市正

令心勞一々申開預御威候はん事をそねみ

何とそ以申様を惡逆二申しつめ候て秀頼

より御勸氣をかふむり御前遠罷成候はば

我子共何も市正跡被仰付御家老にも

なさはやと存ける寔二秀頼の御運之

末是也扱女中衆大坂へ令登城駿府御機

嫌之能事江戸御臺之御事申上何も

草臥可申候間休息可仕由二秀頼も

御袋様も入らせぬふ其時正永御側へ寄候て

一大事を承候間申上度と申御袋驚

思召何事そやと御尋候へハ御前之人をのけ

候て申ハ市正こそ逆心いたし大御所様と

一味仕令談合此御城を取田舎二御國替

被成候様二内談仕候先秀頼様末江戸へ

御智入なししからは御智入をすすめ申

江戸へ下し申江戸におさへ置申大坂之

御城御取有へし若又秀頼様御下無之

候はば江戸御臺様と御袋と御一躰之

御事なれハ御見廻二御下向候へと申すすめ

御下向候はば人質二取申大坂之御城御取

候へと御相談相極り候由駿府二承候へ共

市正殿御國方之人なれハ左ハ有間敷と

存候処二道中土山二參會候へハ我等にも市正

其事粗物語候へハ真にてありけに候とて

涙をなかし申御袋も御前之女中もこハ

いかにと足もとより鳥のたちけることく

なりとこゑもおしますなけきふしける

扱正永も罷帰

片桐市正土山を立京へ上り板倉伊賀守

令對談それより大坂へ行奉行共二令

對談暮二ハ伏見二宿し明日之寅ノ刻

船二大坂へ着午刻計 致登城千帖敷

色々御馳走被下今度駿府二令心勞
色々申開候事共申昨日土山二女中へ
物語申候事は不申大野修理木村長門
渡辺内蔵之助此衆へハ右之女中之物語
被仰開候間此三人尋けるハ今度之次二
駿府へ申事あらハ何にても秀頼之
御為二申上度事あらハ不殘可申上由
御袋様之御意也と被申市正別条無之候
定二女中も可被申 大御所よりなその
やう成事を御かけ被成候はハ緩々と致
御相談とき可申事二三ヶ條御座候とて
土山二女中二申候通を一々申御袋も聞
召て後之わさひをは無御存知正永ハ扱々
能聞て參候ものかなと御感被成市正二
呉服御金被下致帰宿
一一近習衆何も相談二市正開東一味
逆心うたかいなし御成敗可被成し
からハ修理兄弟木村長門渡邊内蔵之助
織田左衛門子等有二被仰付廿三日二市正を
めし終二御袋様御對談不被成候間今度
御對談被御相談可被成由被下市正
御尤之由御返事申扱何も相談先兄駿府
へハ市正慮外之儀有之二付二不慮に秀頼
より令誅罰之由御断御使者可有
市正跡へハ常真を御頼可然是ハ駿府
二も重々被存仁成其上駿府如何と
申來候はば御手きれ尤也と若者とも
すすめ申相談相極廿一日之子ノ刻計二
御袋様より常真へ御書あり常真驚
致登城候へハ御馳走之上二若年寄衆を以
被仰下候ハ今度鐘之銘二付申わけのため
市正を駿府へ付置候処二永々令逗留
能次二と存秀頼へ令逆心条々無疑そ
れに付て明日召寄是二令成敗所也
然は其跡何も若輩也貴老を秀頼より

頼度思召明日より市正ごとく萬事指引
頼思召との御意也常真承驚扱々市正
ハ逆心真とのからすしかれ共無子細
してハ極まるまし若御成敗之上
二關東御手切にも可成か其所二ハいか
常真か分別二難納先市正事少御延引
候て其上二御相談候へかしと申御袋も
四人之家老衆も此事を常真いなや
と申されハ生ておくましとの相談
也乍去今一度御頼候て御覽被成御返
事をにふく被申候はば常真を先討
取可申由御相談極り爰に御袋様之
御前二罷在出頭申中將と云女房あり
是ハ常真之家來也此女此事兼二しり
けれハ御茶をまいらす躰にもてなし
天目を一ツ持常真のあたり二に人なき
透を見て御そばへ寄り御返事悪敷
候はば只今御最期なるへしと申てのき
ければ常真さる人にて茶をのむ躰に
もてなし天目を取口二あてあふ処二又
御使あり市正事重々悪逆二付御成敗
に極候此上は萬事明日より御頼被成
との重二の御使あり常真心得兼老事
元より妄迷二御ために難成候へ共御後見
之儀被仰付難有仕合奉存候此上は不叶
迄明日より御ためを可申上由御請被申
けるあいた御満足被成との儀にて常真
宿二帰候て生駒長兵衛を呼出し談合あり
今度秀頼にたのまれ市正をうたせ
家康と又敵二成度々二張之弓引と人に
わらはれ家のきざと存間急大坂を可
立退存成乍去最早横目を可被付也
女之輿に乗女房を供につれ忍びて可
出先今夜中に市正にいらせんと相談
有生駒申ハ御詔二奉存候御出候事ハ

右之通二子細有まし市正方へハ御書箱
入被遣候へ某親類北村惣左衛門と申者
秀頼衆小身にて罷在候此者市正にも
縁者にて寄子也是をたのみ遣し可
申由申状を請取北村方へ行彼北村を
頼市正方遣す市正驚拜見候得は其心底
具二不被申成仁御越候へ大事ハ可申と
計二名もなく御判計也市正心はやき
仁二頓二心得小駕庄兵衛と云者を為使
諸白兩梅白鳥一道服を為持駿府より之
土産と号して遣しけり常真小嶋に
對談して荒増物語ありけり小嶋馳歸り
急をつけけれハ市正夕部より令發病之由
修理方へ申達不令登城舍弟主膳是を
聞一所二桶籠寄子之侍共少々馳集り
用心きひしく候間市正下屋敷ハ大坂
三の丸二候間大野修理其外取懸可
打果用意候へ共内にも大勢罷籠候間
たやすくも罷成取巻卅おる処二朝日玄久と
申老人あり是は秀頼御袋様と少御好之
有之市正とは縁者也今ほとハ御葉師
之分二千石取大坂二罷在候日頃分別之才
有と人も申候市正内梅戸忠助と申者
玄久所へ馳行初終之儀を委細申聞せ
候へハ玄久驚き急令登城御袋様へも
段々市正女在無之通を申達其上にて
家老衆へも無科段々申通扱何も江御意
廿四日五日六日三日か間御城と三の丸市正
屋敷を幾度も通ひ終に委細申ひらき
市正義子出雲守を人質に指上候間御
袋様も秀頼公も市正逆心無之由御聞開
廿七日彼出雲守を御返し被成被下廿七日
未ノ刻伊藤丹後守青木民部少野々村伊豫守
堀田圖書頭速見甲斐守間野豊後守中嶋
式部少此七人を以被仰渡候は今度市正逆心と

思召候処^ニ毛頭悪逆無之趣申達子息を
人質に出事神妙^ニ思召候也しからは前々
之通指置可被成候得共今度之儀^ニ付秀頼へ
為仕付知行所へ罷退閉門分^ニ御意を
可待候也定^而駿府より御あつかひ之御使有
へし其時被召返如前々之御仕置等之儀可被
仰付又秀頼公下腹之御娘御座候て人不知
わきに御座候を市正^ニ御預被成出雲守^ニ可被
下思召候也と被申渡ければ市正畏^而承
我等悪逆無之由達 上聞殊^ニ御息女様御預
可被下由寔以難有仕合^ニ奉存候早々罷退
可申所^ニ日頃御預置被成候大事之御道具共
御座候間相改一両日中^ニ指上さり其上^ニ
罷退可申由御返事申道具共改候て家老
を付城迄遣之黒印請取廿七日より廿九日迄
不残渡し二の丸^ニ有詰米玉菓迄指上黒
印請取けり其中^ニ大野修理方より人質
を渡しける間人質請取十月朔日早天^ニ
市正兄弟^并出雲守奇子之侍少々同心
茨木へ立退けり